

「2017年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学大学院文学研究科修士課程1年 外賀 葵

今回のプログラムを通じて、私が学んだことは大きく分けて2つある。日本語の授業への参加と現地学生との日々の交流から異文化交流に対する姿勢を学び、共同発表において幸福とは何かについて深く考えることができた。2週間という短い期間でありながら、毎日毎日新しい刺激に触れることができ、自身の今後や人生についても考えるきっかけを与えてくれた濃い日々であった。

まず、異文化交流に対する姿勢について、現地の学生の日本語で交流しようという意欲的な姿勢に強い刺激を受けた。授業中に交流した学生たちが意欲的に私たちと意思疎通を図ろうと様々な話題について日本語で話しかけてきてくれたことにも感銘を受けたが、2週間の滞在を通して、タクシーの手配や道案内といった日々の些細な事にもすべて日本語で丁寧に私たちに伝えようとしてくれ、大学の授業期間中で多忙であるはずなのに、一緒に食事に行ったり、家でもてなしてくれたりと惜しみなく親身になって働きかけてくれたことは本当にありがたかった。逆の立場になった時、現地の学生ほど流暢ではない外国語で同じ事ができるだろうか。忙しくてあまり余裕がない時でもあれほど親身になって働きかけることができるだろうか。異文化交流は、決して語学力を向上させることだけが目的ではない、あくまで人と人とのつながりである。相手のことを思い、互いにはたらきかけることが重要なのだ。このように、プログラムを通じて、異文化交流において根本的かつ重要な心構えについて再認識することができた。

もう一つは、幸福とは何かについてである。これは私を含むベトナム・日本グループの共同発表のテーマであった。若者を対象にしたアンケート調査の結果から、日本人はおおむね労働に勤勉であり、自分のやりたいことができることに生きがいを感じる人が多く、対してベトナム人は労働よりも家族を優先し、自分のやりたいことだけでなく家族や友人と一緒にいられることに幸せ、生きがいを感じる人が多いということが分かった。自分を大切にすることがいかに大事かという主張が近年、日本の若者を中心に流行しつつあると思われる。個人主義を唱える人の中には「家族やきずながいちばん」という考え方は伝統的で古いものと切り捨てる人もいる。もちろん、何を幸せと捉えるかについては人それぞれだと思うのだが、自分の趣味嗜好や仕事での業績を軸にしつつも、平凡かもしれない「人と人とのつながり」をもっと純粋に幸せと感じられるような社会の気風が育っていくことが今後の日本にとって望ましいのではないかと感じた。

グローバル社会である現在において、自分自身が今後の社会を担っていく若者の一人であることを自覚した今、将来は日本と他の国・地域との架け橋になれるよう努めていきたいと強く思う。